

病害虫発生予報 第7号(10月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
トマト・ミニトマト	黄化葉巻病	やや多	野菜・花き全般	シロイチモジヨトウ	やや少
エンドウ	褐斑病、褐紋病 うどんこ病 つる枯細菌病	並		ハスモンヨトウ	やや多
				オオタバコガ	並
ダイコン ハクサイ キャベツ	コナガ	並	タバココナジラミ	並	
			オンシツコナジラミ	並	
野菜・花き全般	アブラムシ類 ハダニ類	並	ミカンハダニ	やや少	
			果樹全般	カメムシ類	やや少

気象予報

1か月予報（予報期間 9月19日～10月18日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう1か月の天候 >

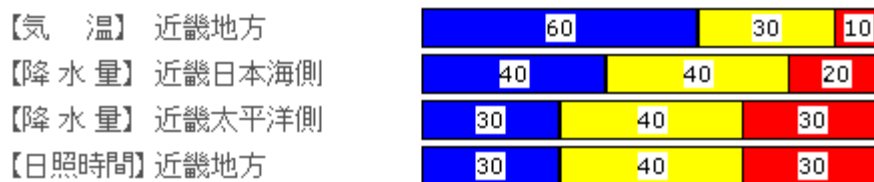
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。降水量は、近畿日本海側で平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率70%です。2週目は、低い確率50%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

		月平均気温 (平年値) (℃)	月降水量 (平年値) (mm)
10月	和歌山	18.8	和歌山 122
	潮岬	19.8	潮岬 244

I. 野菜・花き

<トマト、ミニトマト>

1. 黄化葉巻病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の施設栽培トマトおよびミニトマトにおける9月中旬の発生ほ場率は11%（過去9年間の平均3%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培トマトおよびミニトマトにおける8月下旬の発生ほ場率は89%（過去9年の平均42%）、発病株率は19.6%（過去7年の平均16.4%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 定期的な薬剤散布により感染適期である本ほ初期のタバココナジラミ防除を徹底する。
 - ② 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
 - ③ 家庭菜園を含む露地栽培トマトについては、栽培終了後は速やかに全株を引き抜き、野積みにした上に古ビニルなどで2週間以上覆ってコナジラミ類を死滅させる。
 - ④ 平成27年度病害虫防除技術情報第5号（8月7日発表）を参照する。

<エンドウ>

1. 褐斑病、褐紋病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 10月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 抑制栽培では、開花期ごろからの発生に注意する。
 - ② 多湿ほ場で発生しやすいので、排水を良くする。
 - ③ 種子伝染するので、発生ほ場では採種しない。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 10月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 開花期から発生する。発生初期より防除を行う。
 - ② 乾燥条件が続くと発生が多くなる。

3. つる枯細菌病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 10月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 本病は、褐斑病、褐紋病と葉の病斑が似ているので注意する。褐斑病、

褐紋病が日光に透かしても不透明であるのに対し、本病は光が透けて見えることで区別できる。

- ② 防風ネットの発病抑制効果は高い。
- ③ 種子伝染するので、発生ほ場では採種しない。

＜ダイコン、ハクサイ、キャベツ＞

1. コナガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0.2頭）、和歌山市16頭（過去4年の平均5.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- ② キャベツ、ハクサイでは、収穫後に作物残さを放置するとそこが発生源になり、周辺のは場に成虫が分散して発生が多くなるので、収穫後は速やかに残さをすき込む。

＜野菜・花き全般＞

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬のモモアカアブラムシの発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率21%、生息葉率1.9%）、ワタアブラムシの発生ほ場率は17%（平年26%）、生息葉率は10.0%（平年4.7%）であった。

- ② 黄色水盤（紀の川市）への9月1～20日の飛来数は、206頭（平年79頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① シルバーマルチは有翅虫の飛来防止効果がある。
- ② ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性が低下したワタアブラムシが発生している地域があるので注意する。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は17%（平年22%）、生息葉率は3.3%（平年4.1%）、ナミハダニの発生ほ場率は33%（平年14%）、生息葉率は5.0%（平年2.0%）であった。

- ② 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬のハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）の発生ほ場率は20%（平年27%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① キクに発生したナミハダニが移動するので、キク栽培ほ場に近いほ場では特に発生に注意する。
- ② 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

3. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は0%（平年4.9%）であった。

- ② フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市4頭（平年21頭）、御坊市25頭（平年35頭）、印南町0頭（平年49頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 中・老齢幼虫に対する防除効果は低いので、ふ化幼虫の集団が分散するまでの若齢幼虫期に防除するよう努める。
- ② 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

4. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は33%（平成31%）、生息葉率は1.7%（平成2.5%）であった。
- ② 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は27%（平成35%）、生息株率は2.7%（平成6.0%）であった。
- ③ フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市227頭（平成257頭）、和歌山市298頭（過去4年の平均1,072頭）、御坊市2,472頭（平成476頭）、印南町1,506頭（平成125頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① シロイチモジヨトウに準ずる。

5. オオタバコガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は20%（平成19%）、生息株率は9.3%（平成2.4%）であった。
- ② フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市8頭（平成10頭）、御坊市20頭（平成3頭）、印南町15頭（平成5頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 中・老齢幼虫に対する防除効果は低いので、若齢幼虫期に防除するよう努める。

6. タバココナジラミ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は33%（平成31%）、生息葉率は5.0%（平成5.5%）であった。

7. オンシツコナジラミ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は50%（平成37%）、生息葉率は5.8%（平成5.5%）であった。

8. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は67%（平成54%）、生息葉率は20.8%（平成19.9%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 促成栽培ナス等の育苗は発生ほ場の近くで行わない。また、防虫ネットを被覆して成虫の飛び込みを防ぐ。

9. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率3%、生息葉率0.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① イチゴではミツバチの導入前に徹底防除を行う。

Ⅱ. 果 樹

<カンキツ>

1. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部における9月中旬の発生園率は10%（平年33%）、発生葉率は1.4%（平年8.2%）であった。
- ② 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における9月中旬の100葉あたり雌成虫数は0頭（平年6頭）であった。
- ③ 10月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統の薬剤は年2回以上使用しない。
- ② 秋期の防除が遅れた園では、早急に薬剤散布を行う。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における9月中旬のカキの被害果率は、「富有」4.5%（平年7.2%）、「刀根早生」・「平核無」0.5%（平年1.0%）であった。
- ② 紀の川市粉河の予察灯による9月中旬の誘殺数はチャバネアオカメムシ64頭（平年68頭）、ツヤアオカメムシ60頭（平年48頭）であった。
- ③ 有田川町奥の予察灯による9月中旬の誘殺数はチャバネアオカメムシ27頭（前年128頭）、ツヤアオカメムシ29頭（前年119頭）であった。
- ④ みなべ町東本庄の予察灯による9月中旬の誘殺数はチャバネアオカメムシ185頭（過去5年の平均3,061頭）、ツヤアオカメムシ280頭（同1,114頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。
- ② 園内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ③ 台風通過後や強風後には、一時的に飛来が多くなることがあるので注意する。
- ④ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病害虫防除所コーナーの果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。